町長室からこんにちは No.33

一宮町長
馬淵 昌也

今年は加納久宜元町長の没後百年目にあたります。一宮町でも様々な記念行事が行われつつありますが、先日、久宜公が知事を勤められた鹿児島県でも記念式典がありましたので、私もお伺いをいたしました。

久宜公は、幕末に一宮藩主を勤められ、明治末年から大正初年にかけては一宮町長をお勤めになりました。そして、その間、明治30年代には鹿児島県知事の任を担っておられました。この時期の鹿児島県は、西南戦争の後遺症から立ち直れず、内部抗争ばかりが激しいところだったそうです。ここに久宜公が知事として赴任され、一切の党派性を排した人材登用を行い、農業を中心とした産業の振興、教育の充実、社会組織の構成などに、文字通り全身全霊を傾けてご尽力されました。家産が傾くことも構わず、各種施策に私財を投入されたと伝えられています。その甲斐あって、鹿児島県の農業・教育は、格段の成長を示しました。

久宜公は、その後東京の大森に戻られ、そこでも地域おこしの実践をされたあと、一宮町民の懇請にこたえて町長をお引き受けになりました。そして、鹿児島県知事時代同様に町の発展のために尽力され、一宮を「模範町村」といわれるまでに押し上げられました。

こうした久宜町長の一宮におけるご業績が、鹿児島や東京・大森での地域おこしの実践経験を踏まえたものであることは明らかです。その意味では、久宜公最後の公職であった一宮町長としてのお仕事は、まさしく久宜公の生涯を通じての様々なご経験の集大成であったということができるでしょう。

久宜公の生涯を拝見すると、公のご関心は、中央政界よりも、地方・地域に向けられていたと感じます。今の日本では、人口減と高齢化という未曾有の状況の中で、いかに地方・地域を再建するかが、最大の課題であると思います。久宜公が生涯最後の集大成を果たされた一宮町に暮らす私たちは今こそ、ひたすら地域の発展を思い、邁進された久宜公の精神を自分たちのものとして引き受け、この町の持続的発展を実現してゆかなくてはなりません。公のご逝去より百年を迎える今年、皆様とともに、こうした決意を新たにしたいと思います。